

# 沖縄国際映画祭の企画「JIMOT CM COMPETITION」

## 福富プロジェクトメンバー制作 川崎・生田のご当地CM

### 神奈川県代表作品に



▲ 日本民家園での撮影風景

ネットワーク情報学部志純さん(3年次)の番組制作と運営を行っている。同ワンセグは2011年にスタート、川崎市防犯やスポーツイベントなどの情報共有、地域貢献活動に実績を残してきた。大西さんが生田緑地取材時に、生田緑地運営共同事業体のスタッフに映像作りの腕をかわれ、制作を任せられた。CMのテーマは「地元食文化」。昨年11月、生田緑地で撮影し、吉本興業のお笑い芸人「囲碁将棋」の文田大介さん・根建太一さんと風船芸人の松下笑一さんが出演。日本民家園、岡本太郎美術館をバックに名産品をユーモラスに紹介。多摩区生田緑地で食欲も爆発だ!」の叫びで終わる。

監督を務めた大西さん



## 専大校友を訪ねて



内田 和利さん (平16法)

「社会生活上の医師」として、労働者や生活者に寄り添い、悩みに真剣に向き合ってきた弁護士。昨年12月、法律事務所を川崎市麻生区の新百合ヶ丘駅近くに二人の仲間とともに開設した。専大を卒業して今年で10年。離婚・相続、交通事故、

労働、債務整理など民事事件や刑事事件まで幅広く取り組んできた。「新たに問題になっているスポーツ法にも分野を広げたいと思っています」と意欲を語る。横浜市の出身。弁護士本サリン事件(1994年)。最初に通報した被害者が警察から事件への関与を疑われ、容疑者扱いされた。

### 弁護士活動の原点は人を理解すること

「大きな権力がひとたび間違ると、人の一生を台無しにしてしま

い、取り返しのつかないことになる。間違っているぞ」と指摘できる仕事に就きたいと思いました。その一途な思いで専大法学部へ。川島記念学術賞総代として卒業した2004年に、合格率3.42%という超難関の司法試験を突破した。刑法の佐々木和夫ゼミに属し、さらに、当時、エクステンションセンターの講師を務めていた弁護士の榎村寛道・法科大学院教授の論文対策ゼミにも入った。「佐々木先生から基本を叩き込まれ、榎村先生からは基本の生かし方を実践的に教えられました」。在学中は勉強一筋ではなかった。サークル「法学研究会」に入り、後輩

に教えるゼミのゼミ長を務めるとともに、「プロ野球を観戦したり、カラオケでワイワイやることもありました」。後輩の指導は今も続き、エクステンションセンターの講師を務める。学生相談室の無料法律相談や、校友会組織「法曹会」法律相談の担当も。後輩には「論点を探すな」と指導する。「佐々木先生の教えです。論点は当事者の生の言い分から浮かび上がってくるもの。優れた弁護士は聞き上手だと思います」。学生時代から「人」

「人を理解しよう」と努力する。それが「弁護士活動の原点」と言う。

専大の生田キャンパスに隣接する生田緑地は、川崎市最大の緑の宝庫。プラネタリウムやミュージアムなどの文化施設も充実している。紹介されている名産品の一つ、クワフトビール「スピカ」(同区「ムーンライト」で販売・提供)は12年、

「多摩区には名所や隠れた名産品がある。30秒の中に盛り込むのに苦労した」と大西さん。完成まで3カ月間、監督のほか脚本、出演者のスケジュール管理、衣装選びもこ本大会へ。詳細は同映画祭のホームページで。

### 成果発表と優秀作表彰

発想、表現、発信——プロデュースプログラム創作の基礎を学ぶネットワーク情報学部メディア演習成果発表会と優秀作品表彰式が1月23日、生田キャンパスで開かれ、学生42人が研究成果を披露した。

会場の10号館ホワイエには、川崎市多摩区や専修大学の魅力を描いた個人制作による映像CM42本と、グループ制作によるコンテンツ作品

「地元の豊かな自然をシンプルに鮮明に描くことを心がけた」と言う。専修大学入学センター最優秀賞、同広報課特別奨励賞の2冠を射止めた秦透哉さんの作品は、マウント翻訳カラフルな「専門



▲ 受賞者の皆さん

### 高岡市「ふるさと応援隊」第1号

### 郷土愛に燃える 福岡経さん (法4)

富山県高岡市の広報課「ふるさと応援隊」は、高岡の魅力を紹介する。福岡経さんは、高岡の魅力を伝えるために、高岡市出身者専用の学生寮に「ふるさと応援隊」を立ち出した。高岡市は富山湾に面した県北西部の城下町。県第2の都市だが、東京では「寒ブリで有名な氷見」に比べてあまり知られていない(福岡さん)。同市出身者専用の学生寮(東京・小金井市)に住み、委員長になった3年次からは秋の祭りを改革した。

地元の名所を自らビデオ撮影して上映したり、



### 東史恵さん2位 介護ロボット活用法コンテスト



▲ 東さん(中央)と小沢教授(左から3人目)、ゼミの後輩たち

大学院経営学研究所・小沢一郎研究室の東史恵さん(院経営修2)が介護ロボットの活用法を競う「第1回PARO(パルロ)コンテスト」で準優勝に輝き、12月15日に東京・両国技芸館で表彰された。小型の人間型ロボット

「パルロ」を製造・販売する富士ソフト株式会社(本社・横浜市)が主催。東さんは通信機能のあるパルロでお年寄りや家族を結び、様子を見守ったり緊急時に通報できるアイデアを応募。128件の中から2位に選ばれた。

「パルロ」を製造・販売する富士ソフト株式会社(本社・横浜市)が主催。東さんは通信機能のあるパルロでお年寄りや家族を結び、様子を見守ったり緊急時に通報できるアイデアを応募。128件の中から2位に選ばれた。

市ゆゆるキャラ「利長くん」に登場してもらい近隣住民に愛さようをふりまくなど積極的に高岡色を打ち出してきた。

「高岡の将来を考える学生のプロダクト」まで開設し、地元のイベントや春開業予定の北陸新幹線の工事の進捗状況などを伝える。寮生は総勢約20人、同学年はほかに3人いるが、福岡さんほど郷土への愛情に燃える学生は少ない。

「どういう形になるかわかりませんが、高岡のために貢献したい。桜や紅葉の時期の古城公園は金沢の兼六園に負けないほど見事です。新幹線が開業したら東京から2時間少。多くの人に来てほしいですね」

今年春の創設50周年にあたるため、寮生OBは「実現性が高い」と評価していた。

た。小沢研究室で「介護のイノベーション」を研究してきた東さんは学部在学中から介護に関心が高く、2年次の時にディサービス施設でインターンシップを経験。ホームヘルパー2級の資格を持つ。4年次の小沢ゼミで介護ロボットの展示会を見学したのをきっかけに、ロボットが介護現場をどう変えるのか、修士論文の導入部で介護ロボットを取り上げよう準備してきた。

アイデアの根底には大分県で独り暮らしをしている祖母への思いがある。「91歳で元気ですが、ふだんの様子かわかれば安心。高齢者が住み慣れた家で暮らせる地域包括ケアシステムの中で、パルロが活躍できるようにしたい」と言う。

表彰式には指導する小沢教授やゼミの後輩も駆けつけた。小沢教授は「人とコミュニケーションのとれるロボットは介護される人の癒しだけでなく、家族や介護する人の心的負担を軽減し、地域や施設のコスト低減にもつながる。これら各方面に配慮している東さんの案は実現性が高い」と評価していた。